

佐土原教会 2022年6月12日礼拝説教

聖書箇所：マルコ福音書8章1～21節

説教題：まだ悟らないのですか

小学校で2年生を受け持っていた時、学級の皆でパン作りをしたことがあります。お家の方に材料を整えて頂き、子ども達に持たせて頂いて、家庭科室で作りました。しかし、私の勉強不足というか、経験不足というか、指導が悪くて、まともなパンが出来たのは2～3人で、あとの子ども達のは、ビスケットのように固いものが出来たり、散々でした。今でも、お家の方や子ども達に謝りたい気持ちです。そのように私は、料理のことは何も分らないのですが、ここに出て来る「パン種」というのは、パン生地の一部を焼く前に取って置くものだそうです。それが発酵します。それを次のパンを捏ねる時に「イースト」として使ったようです。少しの「パン種」を混ぜると全体が膨らみました。(私のパン作りでは膨らみませんでした…。)また当時、「パン種」は、「悪いもの(罪)」を表す言葉として使われました。「パリサイ人やヘロデのパン種」が弟子達の中に入ると、弟子達の「悪いもの」が膨れ上がるのです。人間関係もそうではないでしょうか。家族でも、ちょっとしたことで否定的な感情が膨れ上がる現実があるのではないのでしょうか。

今日も、「内容」と「適用」とお話しします。

1：聖書の内容～神の支配を見ない不信仰

今日の箇所は長い箇所ですが、3つに分けることができます。「1番目：1～10節：4000人の給食」、「2番目：11～13節：パリサイ人との議論」、「3番目：14～21節：『パリサイ人とヘロデのパン種』についての議論」。この3つのことが、ガリラヤ湖の周りで起こっています。

この箇所を中心となる言葉は15節「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい」(15)と、21節「まだ悟らないのですか」(21)というイエス様の言葉だと思います。イエス様は弟子達に大切なこととして「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種とに十分気をつけなさい」(15)と言われました。ところが弟子達には、それが理解出来ません。理解で出来ないからイエス様から「まだ悟らないのか」と叱責を受けます。「私を正しく見ることが出来ない時、あなた方もパリサイ人やヘロデと同じではないか」という厳しい言葉です。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」とは何でしょうか。弟子達はそれをどのように受け止めるべきだったのでしょうか。それを考えるために、改めて全体を見て行きます。

この箇所は「4000人の給食」の出来事から始まります。場所は、ガリラヤ湖の東岸です。イエス様の回りには4000人の人々がいました。彼らは3日間もイエス様と一緒にいて、イエス様の話を聞いていました。霊的なものを求めていたのでしょうか。その人々のことを、イエス様の方から「かわいそうに…何か食べるものをあげたい」と言われるのです。弟子達は、既に「5000人の給食—(イエス様が5つのパンと2匹の魚で5000人を養われた出来事)」を経験していたのに、また同じことを言うのです。「こんなへんぴな所で、どこからパンを手に入れて、この人たちに十分食べさせることができますか」(4)。「愚かな弟子達だな」と、私は思いました。しかし良く考えると、自分も同じだと気付かされます。何度も何度も、神様の祝福を経験しながら、しかし何かあると、「神様が祝福を下さるから大丈夫」とは思えないのです。「神様、どうしてですか」と呟くのです。笑えない姿です。今回も、イエス様が7つのパンを使って4000人の人々を養って下さいました。またパンだけではなく、魚もおかずとしてつけて下さったのです。この出来事が何を教えるのか。「神の祝福」です。イエス様を通して「神の祝福」が地上に流れ込んで来ている、イエス様を通して神が働いておられる、それを弟子達は見なければならなかったのです。

その後、イエス様は、弟子達を舟に乗せてダルマヌタ地方に行かれました。ガリラヤ湖の西岸、ガリラヤ領です。するとそこにパリサイ人がやって来て、イエス様に議論を吹きかけます。彼らは

何を言っているかというところ…。彼らも「メシア(救い主)」が現れることを待っていた。「イスラエルの民に『決定的な救い』をもたらす者、そういう力ある者が必ず神から送られてくる」、それを「メシア」と呼び、待っていました。そこで様々な業をしているという評判のイエスをチェックしようと思いました。「あなたが天から来たメシアなら、メシアであるという証拠を見せなさい。私達に判断できるような証拠を見せなさい」、そう言っているのです。イエス様は、今「4000人の給食」の奇跡を為さったばかりです。憐れみに動かされて大きな奇跡を為さいました。小さな地域です。その話は対岸の彼らの耳にも入ったでしょう。また、イエスがしておられた様々な御業の話も、彼等は聞いているはず。それこそ「しるし」です。しかし「ダメ」なのです。イエスがたとえどんな大きなことを為さっても、彼らにとってそれが「自分達が期待している『しるし』、力強い、破壊的な超自然的な現象」、そういうものでなければ、彼らは、それを「メシアのしるし」とは認めないのです。イエスがいくら「憐れみの奇跡」を為さってもダメだったのです。だからイエス様は「しるしは絶対に与えられません」(12)、「あなた達の見たいと思っような『しるし』は、罪の世が『これが神の救いだ』と判断できるような『しるし』は、与えられない」と言われたのです。なぜ、イエス様は、彼らの望んでいるような「しるし」を為さらないのか。そんなものは、イエス様が来られた目的ではないからです。神の願っておられる「救い」には繋がらないからです。

2つの出来事の後に、舟の上でのイエス様と弟子達との「パン種」の議論があります。弟子達は、パンを持って来るのを(買って来るのを)忘れてしまったようです。1つしかありません。イエス様と12弟子の分で、最低でも13個は要るのです。彼らは、「どうしよう、イエス様に申し訳ない」という思いで心が占められていたのではないのでしょうか。だから「パン種」と聞いた時に「そこを衝かれた」と思って過剰反応をしてしまったのでしょうか。しかしイエス様は、そんなことを言っておられたのではない。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」に注意しなさいと言われたのであり、また「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」と聞いても全く理解しない彼らの鈍さを責めておられるのです

最初の問題に戻りますが、「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」とは何なのか、弟子達は何を悟らなければならなかったのでしょうか。ここには、はっきりとは書いてありません。「ルカ21章1節」では、別の文脈で、「パリサイ人のパン種に気をつけなさい。それは彼らの偽善のことです」(ルカ12:1)と教えておられます。表面だけを宗教的に飾り立てようとする生き方、神の見栄えよりも人の見栄えを考える信仰、そういうものが弟子達に影響を与える危険がありました。ここでも、そういう意味もあると思いますが、ただ「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」と2つ並べた時に見えて来るものがあります。パリサイ人は「メシアはこうあるべき、こうであらねばならない、こうでなければ認めない」という態度でイエス様に向かいました。イエス様が為さる「しるし」と彼らの期待するものとは違っていた。それで、イエス様において神が働いておられることを見るのが出来ませんでした。「そんなメシアでは困る、私達は気に入らない、認めない」。ヘロデというのは、ガリラヤ領主ヘロデ・アンティパスです。ローマ帝国に後ろ盾になってもらってガリラヤを治めている、当時の現実主義の代表です。ローマの権力に阿ねて、世の中を上手に、豊かに生きて行こうとしました。そしてバプテスマのヨハネの「神の前に悔い改めなさい、神の方を向きなさい」というメッセージを受け入れなかったのです。彼は、自分を越えたところに居られる神を、神の支配を認めることが出来なかった。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」とは何か。それは「イエス様において神が今ここで支配しておられる、ここにも神の支配はある」ということを認めない心です。不信仰です。弟子達は「給食の奇跡」の中に、イエス様の回りで神様が働いておられるのを、イエス様の働きを神が支配し、守り導いておられるのを、認めなければならなかったのです。「5000人の給食、4000人の給食」の経験を土台として、「パンが1つしかない、でもイエス様の回りで神が働いておられる、必要なら神が与えて下さる」という結論を導き出すような信仰が

期待されたのです。

「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」、私達にとっても深刻な問題です。私達も信仰を持って歩いているつもりですが、小さな不幸によって神の支配が見えなくなるのです。「どうして自分はこんな目に遭うのか。神は本当に生きておられるのか」と言い始めるのです。それが「イエス様において世を支配しておられる神の支配」を認めない心です。「パリサイ人のパン種とヘロデのパン種」です。信仰というものは、そんなものではないでしょう。ヘブル書に「信仰とは、望んでいる事柄を確信し、見えない事実を確認することです」(ヘブル 11:1)という言葉があります。信仰とは、「神の存在を打ち消すように見える現実」に逆らうようにして、「いや、神は生きておられる」と信じて行くことです。イエス様は、弟子達にその信仰を期待されたのです。「イエス様において神が生きて、現実を支配しておられること、イエス様において自分達も神の働きに与ることが出来るに違いないこと」、イエス様の御業を経験したからこそ、弟子達はそのことを学び取らなければならなかったのです。あたかも自分達の「生きる現実」に神が介入されないかのように生きてはならなかったのです。

2：信仰生活への適用～神の支配を信じる

弟子達はイエス様に「イエス様において神の支配が来ている。今ここも神が支配して下さっている」ということを、その信仰の洞察を持つように期待されました。イエス様が言われた「悟らない」というのは、「神が見えなくなっている」ということです。神が見えなくなっている時、私達は悟っていないのです。神は私達に、神の支配—(神の恵みの支配)—を認め、信頼して欲しいと願っておられるのです。信仰は応答です。私達にとっても大切なことは、イエス様の「まだ悟らないのか」というチャレンジに応答することです。「神は今、ここも、いや、私の生涯の全てを、イエス様において支配しておられる」という洞察を見失わないようにすることです。

以前ご紹介した気仙沼の印刷所の阿部さんのお証—(「箱舟の中の家族達」という本に記されているのですが)—は、私達を励ましてくれます。大震災、神の働きを否定しようと思えば、その材料はいくらでもあったのではないのでしょうか。「神なんかいない、神が支配しておられるなど信じられない。私の願いとは違う」、そう叫んだとしても、誰が何を言えるのでしょうか。阿部さんのお証の中にも「絶望」という言葉が出て来ます。「自宅が流され、全財産を失い、これからどう生きて行けばいいのかと、絶望感が襲ってきます」、「苦しみのどん底にある私が、どうして主の御名を褒め称えることが出来るだろうか」と言っておられます。神の支配の洞察は危機的状況です。しかし、このご夫妻は、神の支配を見る目を失われないのです。神の働きを否定しないのです。「主は与え、主は取られる。主の御名はほむべきかな」(ヨブ 1:21)。「苦しみに会ったことは、私にとってしあわせでした。私はそれであなたのおきてを学びました」(詩篇 119:71)。これらの御言葉を握りしめ、なお神の支配を信じて、神の働きに信頼して、神と歩こうとされたのです。「私の信じている神様は生きておられる。神は真実なお方である…きっと…『主の御名はほむべきかな』と言える日が来ることを信じ…この試練の中を乗り越えて行きたい」と叫ばれたのです。これが『神の存在を打ち消すように見える現実』に逆らうようにして『いや神は生きておられる』という信仰を持つこと」ではないのでしょうか。あの時、東北のクリスチャン達が、そのような生き方を通して、神が生きて、なお支配しておられることを、私達に証してくれたのです。私達も、その信仰を持ち、イエス様のチャレンジに応えて行きたいと願います。

しかし、そのためには、自分の中に神様への信頼を育てなければならぬと思います。「信頼を育てる」とはどういうことかということ—(この個所が教えるのは)—私達が何かの状況にぶつかった時、これまで経験したことを基に、疑う方ではなく、信じる方に、否定的な結論を導き出す方ではなく、積極的な結論を導き出す方に、踏み出す、その心の向きを常と出来るようにする、とい

うことではないでしょうか。弟子達も「パンの奇跡—(給食の奇跡)」を忘れていたのではないと思います。覚えていたのです。しかし、肝心の時に、前向きな結論を導き出すことが出来なかったということだと思います。

確かに困難の中で前向きな結論を導き出すのは難しいです。だからそのために大事なことは、神がこれまで為して下さった恵みを数えることだと思います。以前、教会の集会で星野富弘さんのビデオを見ました。事故で首から下が動かない。大変な苦しみを通った方が、こう言われたのです。「嫌なこと、辛いことが、いつの間にか良いことになっていく」。本当に言われたかったのは「神は、嫌なこと、辛いことだと思ったことを、いつか祝福に変えて下さった」ということではないかと思いました。星野さんのこんな詩があります。「私は傷を持っている。でもその傷のところから、あなたのやさしさがしみてくる」。傷だと思った。でも実はそこが神の恵みを受け取る所になった。なくてはならない大切なものだった。傷だと思った。でもそこにも神の愛の配慮があった。支配があった。神に在って全てのことに無駄はない。そんなことを教えてくれる詩です。「あてはずれ」の詩もそうです。「あなたは私が考えていたような方ではなかった。あなたは私が想っていたほうからは来なかった。私が願ったようにはしてくれなかった。しかしあなたは私が望んだ何倍ものことをして下さっていた」(星野富弘)。星野さんも恵みを数えておられるのではないのでしょうか。それが星野さんの笑顔を、生きることへの希望を、造っているように思いました。かつて私の友人が私に言ってくれたことがあります。「ここまで導いて下さった神様は、これからも導いて下さいますよ」。恵みを数えることを教えられた言葉でした。

聖書の中にこんな御言葉があります。「主は、あなたをエジプトの地、奴隷の家から連れ出し…あの大きな恐ろしい荒野、水のない、かわききった地を通らせ、堅い岩から、あなたのために水を流れ出させ、あなたの先祖たちの知らなかったマナを、荒野であなたに食べさせられた。それは、あなたを苦しめ、あなたを試み、ついには、あなたをしあわせにするためであった」(申命記 8:14～16)。イスラエル民に「出エジプト」の経験を想起するように語られてい言葉ですが、「ついには、あなたをしあわせにするためであった」、この言葉が私の心に食い込んで来ました。生きていくと、色々なことがあります。でも神は「ついには、あなたをしあわせにするためであった」という御心を持って私達を取り扱って下さるのです。それを経験させて下さるのです。そして最後の最後には、天国という「幸せ」を備えて下さっているのです。だからこそ、恵みを数え、心に神への信頼を育て、この神様が、私の行く道を支配し、導いておられる、という信仰の洞察を見失わないようにしたいと思います。